

# ごみゼロネット推進会（第9回）議事録

開催日： 2009年(H21年)5月11日(月)10:00～12:00

場所： ウエスト（新小金井駅前）

出席者： 平林、加藤、市原、杉本、大橋、加賀谷、伊藤、武田、桐生（作成）

議題：

## 1. エコ金融商品公募への対応提案（平林）

5/8日本経済新聞に「都、エコ金融商品公募」の記事があり、都民と都が預託する30億円を元手に金融機関が環境事業に取り組む企業やNPOに投融資する制度が始まる。これに新生ごみ処理法実証運転事業を乗せることにしてはどうか。期待する成果は①我々念願の実証運転が資金的に可能になる、②パブリシティの関心を集めるPR効果が絶大で、市民の意識改革に極めて有効、③マスコミの話題になれば市も無視できず、動き出すと期待できる、④シニア SOHO 小金井がその活動基盤になってくれぬか、と提案された。

討論では① 5/29の公募が終わり、担当金融機関が決定してから我々が応募すればよいので、半年以内を目途に計画書を作成すれば良い、②計画書には実行の場所等（約300㎡）を具体的に挙げねばならぬので、関係方面との調整が必要、③事業主体になってやりたい企業（東京ガス等）もあるかも知れない、等の意見が交わされた。本件は実証運転への有力な方策なので、①平林氏が進めている計画書を次回の例会で提示・検討する、②平林氏が小金井市に支店がある金融機関に本件に関心を持つ所がないか打診する、ことになった。

## 2. 市議員との会合に備えた資料の説明（桐生）

2009/5/11付け「焼却方式から非焼却方式へ」（2頁）を配布、説明。資料作成の目的は、①伊藤氏がセッティング中の公明党市議員との会合に備えて作成した、②この内容を4/20の前回例会で平林氏が提示した「処理方法の比較表」に落とし込んで完成させる。出席者より、次の各項を加えたいとの意見が出た。

- 「燃焼方式は都市のヒートアイランド化を加速する。焼却炉を設置すれば、小金井市最大の発熱源になる」
- 「4・2焼却炉方式に対して優れている点」に「所要敷地面積が半分以下になる」を追加したい。
- 「4・3これから確定すべき課題」に「処理生成物の安定処分」を追加したい。

## 3. 市議員との会合で見えてきたもの

- 5/1の共産党市議員との会合では①非焼却の処理方式については残渣をどうするか②実績のない方式は徹底したチェックが必要、と指摘されている。1回だけで終わらせず、今後も接触を重ねたい。（市原）
- 現在でも焼却方式の残渣処理に3億円掛けている。新方式なら残渣は画期的に減少するのだが。（平林）
- 経済性からいうとその通りなのだが、市は経済性に全く関心がないようだ。（加藤）
- 市議員たちは「焼却対非焼却」だと賛否両論が激しく対立しているが、「新しいごみ処理方式の実証試験」には殆どの方が賛成している。後者についての実行可能な計画書を持って話し合うことが必要。（平林、加藤）

いよいよ具体的に進めるためには、小金井市市議員に働きかけるべき段階に来た。市原氏は既に共産党議員と会

合を持ち、伊藤氏は公明党議員との会合の場を設定中である。民主党の宮崎氏と斎藤氏には個別に大橋氏が会合を

呼びかけることになった。

## 4. ごみゼロネットへの須藤氏の指摘事項について（大橋）

「ごみゼロネット」中の記事に関し、5/6に須藤という人物から「亜臨界水反応によるごみ処理法へのひとこと」として「亜臨界水技術」と「炭素化技術」について綿密な問題点提起をしてきており、大橋氏が1に「ペンツピレンについて」「亜臨界水処理の加水分解」「炭素化方式と他の方式の組合せについて」として返答した経緯について説明。（大橋）…特に回答中の「三井造船が竣工したキルン式熱分解炭化リサイクル技術」（八戸で自動車用90ト/日が稼働中：生成物炭素・油・金属の用途も明確）は新情報で、他のメンバーの強い関心を惹いた。

- 須藤氏は元大手ゼネコン佐藤工業の技術者で、現在は別の企業に勤めている。環境市民会議のメンバーで真面

目な人物である。(加藤)

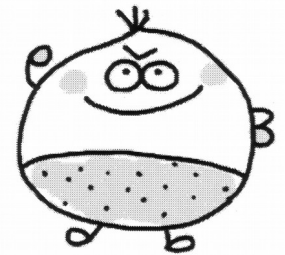
1 / 2

## 5. 炭素化で生じる炭素の処置について (全員討論)

- 須藤氏の指摘にある「炭素化で発生する炭素の捌け口」についての疑問は解決しておく必要があり、EEN 社の見学では山のように袋詰めした炭素が積み上げてあり、炭素が自然発火しない実績を見て安心した。(桐生)
- テクノプラント社は生成物炭素は価格2000 円/トで全量を引き取ると確約している。同時に発生する塩酸と油は無償で引き取るといふ。EEN 社はこれから検討するといっている。(加藤)
- 発生炭素は処理前のごみ重量の1/5 ~ 1/10 に減量しているのだから、実証運転段階では、エコセメント処理に廻したい。「定常的にある程度の量が発生するなら、製鉄の還元剤として引き取りますよ」JFE スチールの関係者がいってくれている。有機炭素は価値ある物質と聞いており、活用については色んな選択肢がありそうだ。(平林)
- ポリ袋も透明なものはほぼ安心だが、着色してある中国製の袋は各種の重金属を含むと聞く。(伊藤)
- 中国製に限らず、日本製でもプラスチックの可塑剤にはメーカーが公表しない各種の重金属を含んでいる。EU ではそれらにも規制があるが、日本は野放しになっている。(加藤)・・・この会でも、何れ重金属問題を討議しなければならない。

## 6. ごみゼロネットのキャラクター提案 (市原)

既にMLで開示したキャラクター2件の取り扱いについて提案(市原)・・・早速、機会あるごとに使用することとなった。



## 7. その他の事項

- 市原氏の求めに応じ、加賀谷氏がごみゼロネットの全頁を印刷。87 頁に及び、その量に一同感服。
- ごみゼロネットは大橋氏が情報収集するが、洩れもあるので、皆からの積極的な記事提供を期待する。(大橋)
- 最終処分場が満杯になる時期が迫っていたが、エコセメント処理により 30 年間先に延びたという。(平林)
- 日野市は「ごみ非常事態宣言」を出してから3人1組50 チームの「ごみ対策チーム」を編成して活動させた。市長は100回以上の集会を持った。説明会に参加した市民の累計は3万人を超している。町田市も「ごみ非常事態宣言」を出して134人の市民による13分科会を運営し、市の16課から19人の職員を専任させて取り組んでいる。それらの活動に予算2億円を付けている。小金井市は「ごみ非常事態宣言」を出しただけで、何も具体的な切迫した行動を取っておらず、市民から見て全く真剣味と努力が不足しているのが残念だ。(加藤)
- 加藤氏より資料「ごみ焼却炉の談合住民訴訟判決」(2頁)、「生ごみ減容化の提案」(1頁)と「小金井市可燃ごみ半減の提案」(1頁)の3件が配布され、簡単に説明された。
- 小金井市の「燃やすごみ」16,084トの内訳で「生ごみ」は32.8%、「紙ごみ」は38.7%であった。体積重量比で「生ごみ」は比重約0.6、「紙ごみ」は比重0.1~0.2である。(加藤)
- (株)サンライフの堆肥化プラントは周囲の住民の理解を得るため300回以上の説明会を持ったという。稼働前の時点では小金井市からの生ごみを受けて入れるように話していたが、最近では受け入れないと返答してきた。

食品工場の生ごみは発生日に持ち込まれ、腐敗臭が少ない。対して自治体の生ごみは数日放置して強烈な腐敗臭があり、運搬道路の周辺住民の苦情が出たら、事業は即停止となるので、そのような危険は犯せない。(加藤)

- 生ごみといっても、食品工場から出て当日中に処分されるものと、家庭から出て数日経ってから収集されたものは全くの別物と考えねばならない。(平林)

## 8. 集会への参加の勧め

(1) 公明党市議員への説明会は5月18日(月)10時からウエストと設定するよう調整する。出席可能

な人には、決定次第通知する。（伊藤）

- (2) 5月29日（金）19時30分からかえるハウスで片山かおる市議員と有志市民とにごみ問題で話し合いを設定してある。皆さんの参加を募りたい。（市原）〔かえるハウスは農工大通りはドラッグ向かい筋約100m東。軒先に大きな看板が出ている〕

以上

次回打合せ 日時：6月1日（月）10:00～12:00 / 場所：ウエスト

2 / 2